

## 第 2 回 第五次門真市学校適正配置審議会 議事録

開催日時 令和 6 年 2 月 5 日（月） 午前 10 時～午後 0 時 20 分

開催場所 門真中町ビル 会議室 C・D

出席者 横山俊祐、西孝一郎、新谷龍太郎、吉岡眞知子、岡本富男、勝川喜美子、川村早余子、小阪和之、後藤忠夫、日置芳太郎、平生眞悟、船越叔美、山田颯、岩佐美奈子、脊戸利子、邨橋雅広

事務局 八木下副教育長、鈴木教育部長、大倉教育部次長、峯松教育部総括参事、渡辺教育企画課長、高岡教育総務課長、高山学校教育課長、宮崎教育企画課長補佐、古川教育企画課兼学校教育課副参事、藤澤教育企画課主任、奥本教育企画課主査

傍聴者 0名

議 事

### ○開催 事務局

定刻となりましたので、第 2 回門真市学校適正配置審議会を開催いたします。

本日はご多忙の中にもかかわらず、ご出席いただきありがとうございます。

本日、司会を務めます、教育部教育企画課の奥本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、18 名中 16 名がご出席されており、門真市附属機関に関する条例の施行に関する門真市教育委員会規則第 5 条 2 項の規定により、会議が成立していることをご報告申し上げます。

本日は、藤田委員、本田委員はご都合がつかず、欠席となっております。

また、後日議事録を作成するため、会議を前回同様、録音させていただいております。ご承知おきください。

次に、お手元の資料の確認をしたいと思います。

- 1 点目 会議次第
- 2 点目 審議会委員名簿
- 3 点目 資料 1 第 1 回審議会のふりかえり
- 4 点目 資料 2 門真のめざす教育と取組の現状について
- 5 点目 資料 3 西先生講演資料
- 6 点目 資料 4 門真市立学校の変遷について
- 7 点目 資料 5 中学校区ごとの基本情報
- 8 点目 資料 6 学校位置図

となっております。過不足ございませんでしょうか。

それでは、以降の進行は、会長にお願いしたいと思います。会長よろしくお願ひいたします。

## 会長

皆さん、おはようございます。月曜日の午前1週間のスタートの時に、雨の中、お集まりいただきありがとうございます。本日は議事次第にあります、門真のめざす教育についてどういうものなのかということをお教育委員会に、それから、西先生に特につながりという視点で小中一貫教育というのがどういうものなのかについて、ご紹介いただきます。門真がこれからこんな教育をやっていくんだっていうのをご理解いただき、そういう教育を実現するためには、どういうことがこれから考えなきゃいけないのかっていうことで門真の実態について、学校の歴史ですとか地域とのつながり方あるいは学校の規模、子どもの数等についてご説明いただきます。それを踏まえて今後どういう考え方で門真の学校を組み直していくのか、再編するのかなということを中心に議論をしながら、どの場所をどう組み直すかということを検討していくための手がかりをお出しいただくことで、議事を進めてまいりたいと思います。

まずは、資料1を元にして、第1回前回の振り返りをしていただきたいと思います。よろしくお願ひします。

## ○第1回審議会のふりかえり

### 事務局

案件1.「第1回審議会のふりかえり」について説明をさせていただきます。

資料1をご覧ください。01 まず、第四次答申についてです。

第四次の審議会では、学校のあり方を議論するだけでなく、「門真のめざす教育」を考えて、それらを実現できる学校を創っていくにはどうしたらいいかについても議論をしていただきました。その議論の中で、子どもたちの将来の自立に向けて大切にしたい、3つの人とのつながりとして縦のつながり、横のつながり、将来の自分とのつながりとして横の図を作成いたしました。この図については、後ほど、改めて事務局より詳しく説明をさせていただきます。

そして、具体的提言としては、3ついただきました、いただいた提言に関して全て前に進んでいる状況です。

次に、下向きまして、02 令和の「日本型学校教育」についてです。

前回は、令和の「日本型学校教育」について説明をいたしました。どう学ぶかだけではなく、学び方に合わせた環境も大切だということをお伝えしました。

さらに、下向きまして、03 門真市立学校の校舎についてです。委員のみなさん、ご存じの通り、老朽化等が著しく、ほとんどの学校で築50年を超えております。前回の審議会では、具体的な写真を用いて、どんなところが老朽化しているのかを説明させていただきました。また、校舎が建設されてから、教育内容も大きく変化しており、この教育の変化に対応するには、校舎を建替えたり、改修したりすることが必要になっているということを説明させていただきました。また、前回の審議会の意見としては古くなっている校舎が多いので、安全に過ごせる校舎を作っていく必要であるとか、トイレの改修が必要不可欠といったご意見がございました。

右に行きまして、04 児童生徒数の推移です。

児童生徒数の推移としては、著しく、児童生徒数が減少しており、今後の推計でもその傾向にあるということを説明させていただきました。昭和 55 年当時は 24,088 人だったものが、令和 5 年には 6,625 人となっており、約 27.5%、おおよそ 4 分の 1 にまで減少している現状です。推計上の見込として小学校では単学級、中学校では 2 クラス以下など、適正規模とは言えない状況です。「門真のめざす教育」で大切にしている人とのつながりである、異年齢との「縦のつながり」やクラスメイトなど、同級生等との「横のつながり」を創る上でも、課題となる学校が出てきている現状でございます。

委員のみなさまからは、門真の未来として、ここ数年の未来ではなく、遠い未来を見据えながら何をめざすのかといったことを柱におきながら議論するべきであるといったご意見がございました。

最後に、その下、05 今後のまちづくりについてです。

前回の審議会では、市政 60 周年の記念動画の一部を視聴していただきました。動画を見ていただいた通り、今後大きくまちづくりが進む予定でございます。また、動画で（仮称）水桜学園が出てきたように、これらまちづくりの一つとして、教育も重要な役割を担っており、本審議会の答申についても、今後のまちづくりに大きく寄与するといえます。駆け足で説明をさせていただきましたが、以上が第 1 回審議会のふりかえりでございます。

## 会長

ありがとうございました。

ご確認いただいて付け足しておきたいこと、あるいはご意見等ありましたら、ご発言いただけますが、よろしいですか。これに関しては、非常によくまとまっていると思いますので、よろしいでしょうか。

では、次に移りたいと思います。この話を踏まえながら、今日の議論は進んでいきます。全部関係しておりますので、これをベースにして前半は、01、02 について、まず教育委員会からめざす教育について、次につながりということで、特に小中一貫校についての紹介を西先生にさせていただきます。それから、後半の議論として、01 とか 02 を実現するため 03、04、05 をこれから、どう調整、改善していくのかということについて、議論を進めていきたいと思います。学校再編はどのような風にあるべきなのかということに関して、これをベースに議論を展開しますので、よろしく願いいたします。

では、2 つ目の議題になりますけれども、01、02 をベースにして、まず、事務局から、門真のめざす教育がどういうものなのかをご説明いただき、次いで、西先生から小中一貫校を中心につなぐということの意味とか方法等についてご説明をいただきます。それを踏まえて、最後に少し、門真のめざす教育はこれでいいのか、他に何か考えなきやいけないのか。前回は、勉強会ということで、令和の日本型学校教育や門真の学校の現状、そして門真の保育園も幼稚園、あるいはこども園も一体的に考える必要があるのではないかとか、バカロレアの話も、出たと思いますけれども、国際水準に達するような学校作りっていうのも必要になってくるのではないかと議論もありましたので色々踏まえながら、検討し続けていきたいと思います。

事務局から「門真のめざす教育」について説明をお願いします。

## ○「門真のめざす教育」について

## 事務局

案件2.「門真のめざす教育」についてです。まずは事務局より、門真のめざす教育と取組の現状についてを説明をさせていただき、そのあと続けて、西副会長より、小中一貫教育についてお話をさせていただきます。

この門真のめざす教育というもののなんですけれども、令和2年2月に出されました、第四次門真市学校適正配置審議会答申、第1回の審議会で、お渡ししているピンク色の冊子ですね、こちらの答申で、示された図でございます。めざす教育については、その後、令和3年2月に出しました、門真市教育振興基本計画2021、こちらでも記載をしております。こちらでは、本日ご出席の岩佐校長や、新谷委員にも参加をしていただいて、計画を立てたというところでございます。門真のめざす教育とは、どのようなものなのかというところでございますけれども、端的に言いますと、多様な人とのつながりを大切にした教育を行うことで、将来の自立につながる教育を行っていくというものでございます。この後、詳しく説明をさせていただきますが、ここでは、人とのつながりを大きく3つに分けております。1つ目が縦のつながり、そして2つ目が横のつながり、3つ目が将来の自分とのつながりです。この3つの人とのつながりを大切に、門真のめざす子ども像になっております、将来の自立をめざして自分の生き方を見つける子ども、こちらに育てていこうというのが、門真のめざす教育でございます。

それでは、つながりって具体的にどういうことなのかというところを、1つずつ説明をさせていただきます。

まず1つ目が、縦のつながりです。これは、異年齢と、年齢の多様な人との関わりを大切にしていこうというものです。お兄ちゃんお姉ちゃん、カッコいいなとか、ゲストティーチャーで来てくれたあのプロの選手カッコいいな、なりたくなっているような思いを子どもたちに持ってもらう。そして、それだけではなくて、小学校2年生になったし、1年生にカッコいいところ見せようかなという思いだとか、6年生で最高学年なので、低学年とか、困っていたら私たちが助けてあげるといったような、上の年齢だけじゃなくて、下の年齢の人との関わり、つまり多様な年齢の人との関わり、これを大切にしていこうというのが縦のつながりでございます。

次に、横のつながりです。これは、先ほども説明あったんですけれども、同学年や同級生、地域、保護者などとの関わりを大切にしていこうというものです。第1回の時に、令和の日本型学校教育で個別最適な学びというものがありました。もちろん、自分にあった学びをすることもものすごく大切です。ただ、国も言っているように、それだけではなくて、みんな力を合わせて話し合いながら学習を進めていく、協働的な学び、これも大切です。そのような学びの中などで、人と人が、関わることの良さであったりだとか、良さだけではない、難しさだったりというところも、子どもたちに知ってもらいたいと思っております。そして、これらを感じる機会をこの義務教育の段階からたくさん設けることが、最後に、改めて説明させていただきますけれども、門真のめざす教育であります将来の自立、これにつながってくると考えております。これが2つ目の横のつながりです。

最後の3つ目に行く前に、縦と横のつながりの関係を少し見たいと思います。これは単純に、線で表すことが難しく、例えば、地域の大人。地域は横のつながりと置いています。大人という年齢的に上なので、縦のつながりです。つまり、言ってしまうと斜めのつながりのようなつながりになるかと思うんですけれども、縦のつながりであり、横のつながりでもあります。といったところから、この図で表す上では、少し立体になっているかと思いますが、面として、第四次の時は、この縦と横の関係を表したというところでございます。

最後に、3つ目です。将来の自分とのつながりです。小学校や中学校など、年齢による、

その時々で、つながる人だとか、つながり方みたいなものは、変わってくると考えております。そのような、成長していく中で、縦と横のつながりを、このように何層にも重ねていくというようなイメージでございます。そして、その積み重ねる時々で、今の自分のことを知ったり、振り返ったり、将来の自分のことを考えていく。これが将来の自分とのつながりでございます。

以上、3つのつながりをまとめたものが、冒頭スライド資料でもご提示した、この図でございます。この3つのつながりを大切に、人とのつながりを積み重ねて、その都度、自分自身を振り返って、自分の生き方をまた考えていく。こうすることで何度も、申し上げておりますが、最終のゴールである将来の自立、こちらにつなげていくのが、門真のめざす教育でございます。

そして、このめざす教育をする上で、縦や横のつながりが作りやすい環境なのかみたいなところは、非常に重要になると考えております。他にもあるかと思いますが、例えば、横のつながりを作る上で、この学校はちょっと同学年の子どもの数が少なすぎるのではないかといったことなど、このつながりの視点を、今後考えていただく学校のあり方について考える上でも大切にさせていただきたいというように考えております。ここまでが門真のめざす教育です。

それでは、具体的にこの人とのつながりを大切にした門真のめざす教育をこの新しい学校を作っていくということ以外にどのように教育活動に落とし込んで実現しようとしているのかというところでございます。

より色濃くこちらを反映させて取り組みを打ち出しているのが、本市のキャリア教育でございます。令和5年2月に策定しました門真市キャリア教育指針こちらホームページにも掲載しておりますが、お手元の資料3として概要版を配布しております。こちらは、門真のめざす教育や門真のめざす子ども像の実現に向けて、人とのつながりの視点を大切にしたキャリア教育を、小中9年間の連続性を持って教育活動全体で行っていくということが、述べられております。つまり、ゲストティーチャーをお呼びして、子どもたちが授業を受けて、これでキャリア教育ができたというわけではなくて、それで終わるのではなくて、もちろん、ゲストティーチャーも積極的に読んだらいいと思うんですけども、日々のいつも実施している授業でも、このキャリア教育の視点を大切にしていきたいというものでございます。

そして、日々の授業でも、このキャリア教育を実践していく上で、この指針では、門真市キャリア教育というものを定義しております。これは何かと言いますと、将来の自立をめざすためにつけたい力として、チャレンジする力、生き抜く力、つながる力という3つの力を上げております。

この力の中身を、少し具体的に言いますと、例えば、チャレンジする力だと、粘り強く物事に取り組む力や、課題を見つけて解決する力。生き抜く力だと、職業や働き方を知るといったことや、そのためにまずは自分自身を知ろうということ。そして、つながる力というのは、相手の話を理解する力や、困った時に誰かに助けてと言えるような、相談できる力をイメージしていただけたらと思います。これは、国で言う基礎的・汎用的能力と言いまして、どれもテストの点数だけではなかなか見えにくいような力でございます。

そして、この力を育むためには、子どもたちにもっと多様な他者との関わりを持たせたいというように考えまして、門真のめざす教育で大切にしている、この3つの人とのつながりの視点を、このつけたい力と合わせて、教育活動全体でこの視点を持って授業していくということを、門真市版キャリア教育と定義をしました。そして、門真のめざす教育同様、最終のゴールが将来の自立でございます。

なお、この指針を策定するにあたっては、約2年間かけて、現場の教員の先生方と共同し

て率直な困り感や課題など挙げていただいて、指針の策定を進めていきました。

またこの指針は、つきたい力の例を示すだけでなく、実際に先生方にこの門真市版キャリア教育を実践していただかないと、子どもたちにつきたい力をつけられないと思いますので、具体的なモデルプランもあわせて現場の先生たちと、協働して作成をしまして、多忙な先生方が日々の授業で、門真市版キャリア教育の視点を持った授業を少しでも実施しやすいよう作成を進めました。そして、昨年度の2月によりやく完成をし、策定をしたというところでございます。ここまでが、門真市キャリア教育指針でございます。

そして、この後、西副会長に説明していただく小中一貫教育について、少しお話をさせていただきます。まず、キャリア教育というのは、小中一貫教育よりも、どちらかというところ、もっと広い意味で、生涯にわたってといった意味合いを持ちます。なので、より長い期間というところをイメージしていただけたらと思います。一方で、小中一貫教育というのは、その中のキャリア発達をする上で非常に重要な時期である義務教育段階の小学校と中学校をそろえて、つなぐ教育のことを示します。

資料をご覧いただけたらと思うんですけども、A小学校と下のB小学校がC中学校区にあるとします。例えば、このA小学校とB小学校の小学校どうしであったりだとか、それぞれの小学校と中学校が、子どもたちの情報などをきちんと共有できていなかったり、また、授業スタイルだったり、きまり、学習方法等が大きく異なっていたりします。そうすると小学校から中学校に上がるタイミングで、大きすぎる変化やギャップに、子どもたちは、より戸惑いを持ってしまいます。また、小中9年間という系統性を生かしきれていないため、子どもたちにどんな力をつけたいのかや、めざす方向性がブレてしまって、9年間というスパンで見た時に、よりよい教育をしていくということが難しくなります。

そのような意味でも、小中一貫教育というのは、小中一貫教育は、小6と中1をそろえるということだけではなく、学校と学校をそろえてつなぐという意味合いがあります。そうすることで、この9年間という視点で、子どもたちを育てることができるというものでございます。

ここからは、本市の小中一貫教育の取り組みの1つとして、ご紹介できたらと思います。これもキャリア教育について関わるものではありませんけれども、先ほどの門真市キャリア教育指針の考え方を基に、では、どんな力を9年間でつきたいのかということについてです。

現在、本市では、キャリア教育全体指導計画というものを各中学校区で作成しており、9年間で重点的につきたい力やその力と関連する教科の単元などを検討しています。またこれは各中学校区で作成を進めており、小学校の教員と中学校の教員が、何回も集まるなどして検討を重ねていると聞いております。本日は、この後、西副会長にも、小中一貫教育について、より詳しくお話をさせていただいて、委員の皆様にもご説明いただくとともに、教育委員会としても、今後より一層の小中一貫教育の取組に向けた参考にさせていただけたらと思っております。西先生、この後も、よろしく願いいたします。

以上が、門真のめざす教育と取り組みの現状についてでございます。

## 会長

ありがとうございました。「つながる」ということがキーワードになっています。おそらく先ほどのご説明であったように、最終的には、キャリア教育というのを単純に職業教育という風に捉えずに、生きる力であったり、チャレンジする力、それからつながる力を育てていって将来自立した人間となることを目指すのが門真の教育の基本的な考え方ではないかというように思いました。西先生の小中一貫教育の話をお聞きして、その後にもまとめて議論

したいと思います。西先生、よろしく申し上げます。

## 副会長

それではよろしく申し上げます。事務局からの話で「人のつながりの中で」と言わずに、「人とのつながりの中で」とあったことに対して、ああそうだなと改めて感じました。「人とのつながり」と言った時には、自分から働きかけるというイメージが出てきます。「様々な人とのつながり」とか、「多くの人とのつながり」とか、「年上の人とのつながり」というように、人の前に、いろいろな言葉がついてくるのだなと思いました。「人とのつながり」という言葉について、事務局内でさまざまな審議をされたのでしょうか、とてもいいなと感じたところです。

また、キャリア教育については少し付け足したいと思います。キャリアというのは職業教育のような意味で捉えられたりすることがあります。キャリアというと職業を思い浮かべるからでしょう。しかし、広い意味では、人生とか生き方とかいうものがキャリアと呼ばれていますので、今の門真がめざされているキャリア教育というのは、広い意味で捉えた方のキャリア教育と考えた方がいいかなと思いました。

それでは、「わかりあい、そろえて、続けてつなぐ小中一貫教育」ということで少しお話をしたいと思います。

まず、その小中一貫のイメージですが、小、中学校をつなぐリレーゾーンだというように考えてみてはどうでしょう。私自身、以前、小中一貫校に勤めておりました。その学校は施設が分かれていました。私はそこで、教頭として勤めていました。そのようなこともあって、中教審の小中一貫教育部会に参加することになりました。その中でも、リレーゾーンという発言をしていました。小学校1年生は、幼児教育と学校教育のリレーゾーンだということです。それから、小学校6年生と中学校1年生は小、中学校のリレーゾーンで、できるだけスピードを緩めないで走っていくこと、これがとても大事だなということを思いました。私がいたその小中一貫校でも、6年生から中学校1年生になった時に本当に全くスピードが緩まらなかったです。これまでいた環境の中で教育が続いていくので、滞りが本当にはないのです。こういうようなことから小中一貫教育のイメージをリレーゾーンと考えました。よく、小中一貫教育は、小中学校のギャップをなくすため、とか言い方をされたりするんですが、それだけじゃなくて、もっと積極的な使い方ができるということです。

次に、なぜそもそも小中をつなぐようになったのかということです。

その背景の一つめとして、子どもの身体的な発達が早くなっているということがあります。これは昭和23年と平成25年の男の子の身長の平均値を比較したものです。グラフの見方ですが、色の薄い方が昭和23年で戦後間もない頃、それから、色が濃いほうは平成25年となっています。これを見て、どこで男の子の身長がよく伸びているかという、昭和では14歳、15歳、中2、中3の頃となっています。男の子は中学校になってから身長が伸びると、以前はよく言われました。それに比べて、今の子どもはどうかというと、12歳、13歳、小学校5・6年生のころによく伸びています。これだけ差があります。次に、女の子の身長はどうかというと、これも昭和23年の方は15歳ぐらいでよく伸びています。ところが、今は、女の子は10歳、11歳のあたりでよく伸びています。ここにもやはり時間差が生まれています。男の子の体重平均を見てみると、これはもう見て明らかで、以前は中2、中3ぐらいがよく体重が増えたけれども、今だと、11・12歳、小学校5、6年生で体重が最も増えています。このように子どもたちの身体的発育が、以前に比べて少なくとも2、3年、場合によって3、4年ぐらい早くなっているということがわかります。このような点から、何らかの対応が必要になったということです。

次に2つ目の背景として、段差への対応が必要になったということです。これには、不登校の児童生徒数の問題があります。不登校児童の数が小学校6年生までこれぐらいの数であったところが、中学校1年生になると一気に不登校児童が増えています。これは、顕在化してくるということかもしれませんが、ここにも段差への対応が必要になってくるということになります。それから、もう1つの段差として、自己肯定感の問題があります。これは以前から、小中一貫教育をやっている他市のデータです。「自分が周りの人、家族や友達から認められていると思いますか」という問いに対して、4年生ぐらいまでは肯定的な意見が多いですね。ところが、5年生ぐらいから否定的回答が増えていって、中学校3年生、9年生になると、こんなに否定的な回答が増えてしまうということです。この自己肯定感も段差の問題です。

余談で申し訳ないですが、私の姪っ子がフランス人とのハーフなんです。京都にある京都国際フランス学園というところに行っていました。姪が、今度、大学受験するということで、面接の練習を頼まれたので、私が面接の練習をしました。その中で、姪に、自分の長所と短所と教えてくださいと言ったんです。すると、長所はなんでも粘り強く最後までやることですって言うんです。では、「短所は？」と聞くと、どう答えたと思いますか。「短所は、考えたことがない」って言ったんですよ。本当に、衝撃を受けました。これは面白いなと思って、「ぜひ面接でそう言ってね」って言いました。これはフランス人の父親にも聞いてみたいと思って、彼に聞いてみると、「よくわからない。得意なことと不得意なことはある。でも、短所ってパーソナリティの部分についてだから考えていない。」と言いました。もう1人、その姪っ子に彼氏がいて、彼もフランス学園に通っていました。彼は日本人で、ずっと日本の教育を受けてきました。その彼に、「短所は？」と聞いてみたら、いっぱい出てきました。日本の中にある学校ではあり、同じフランスの高校に行っているのにこんなに考え方の差が出てくるのは面白いことですね。日本の教育は、どちらかというと短所を埋める型の教育ですね。「あなたのだめなところを埋めていきましょう」みたいな教育ではないかなと思います。だからこの否定的回答が増えてくるのではないかなと思ったんですよ。改めて「短所って考えたことがない」という教育したいなと思いました。

3つ目の背景として、人とのつながりが少なくなったということがあります。このグラフは、世帯別構成割合です。3世代同居は、昭和61年、30年あまり前までは15.3パーセントあったのですが、平成24年には半減しています。また、4分の1しか子どものいる家庭がない状態です。この資料から、今の日本は、人とのつながりが希薄になっているのではないかと考えられます。このようなことから、改めて門真のめざす教育の価値が見えてくると思います。門真は、「人とのつながりの中で学び育つ学校」をめざしています。これは、門真市だけではなくて、日本中が考えていけない問題ではないかなと思うところです。

次に、小中連携とか一貫教育についてですが、改めて定義しておきたいと思います。小中連携教育のほうは、実はもう50年、60年も前からやっていたことなのです。小中連携教育は、「小、中学校が、互いに情報交換、交流することを通じ、小学校教育から中学校教育の円滑な接続をめざす様々な教育」とされています。キーワードは「情報交換、交流、接続」です。6年生を担当して、卒業した子どもたちが中学生になったら、小中連絡会などをやって、中学校の先生に卒業生の様子を聞いているというのも、小中連携教育の一つです。

では、小中一貫教育は何かというと、「小中連携のうち、小、中学校がめざす子ども像を共有して、9年間を通じた教育課程を編成し、それに基づき行う系統的な教育」と定義されています。教育課程というのは、教育の計画のことです。9年間を通じた教育の計画を作って、それに基づいて行う系統的な教育を進めるということです。ここにも、3つのキーワー



ドがあります。まず、「共有」というキーワードです。これは簡単に言えば、「わかりあう」ということです。次に、「一貫」というキーワードが出てきましたが、「一貫」っていうのは、例えば、あの人は、ずっと言うことが一貫しているとかいう言い方した時には、同じことをずっと続けていっているっていうことになりますよね。だから、共通していることを連続していくことが一貫。簡単に言えば、「そろえて続ける」ということになります。そして3つ目のキーワードが、「系統性」ということです。「系統性」というのは、特に縦に「つないでいく」ということです。つまり、小中一貫教育っていうのは、「共有」+「一貫」+「系統」となります。今日のサブタイトルとした、「わかりあい、そろえて続けて、つなぐ」のが小中一貫教育です。小、中学校で、何をわかりあっていくのか、何を共有していくのか、どんなことをそろえて続けていくのかとかいうことを考えるわけです。

それでは、それぞれの内容について、「共有」、「一貫」、それから「系統」について、ざっと説明していきたいと思います。

まず、「共有」です。共有というのは、めざす子ども像を共有するということです。これが難しく、出発点でもあり、到達点でもあるんですね。実際に私も中学校の教頭としていましたが、ここに小学校の先生が入ってきて、同じように子ども像を「共有」していくということは、本当は最初にやらないといけないことだけれども、「共有」ができれば、もう到達点と言えるぐらいなかなか難しいことでした。

ある地域では、まず、校長先生からスタートして、こんな方針でやっていこうと考えました。それから主任会に渡して、例えば生徒指導主任とか、こういう主任会で、どんな子どもをめざしていくのかを考えたそうです。その後、その中学校区では、いわゆる先進校を視察して、そのままのプランをなぞって、やがて自分たちの学校に合ったものにしていっていました。そのような取り組みの中で、先生たちの自信とか意欲も生まれていったと聞きました。それからさらに、プロジェクト制という、みんなで考えていくような仕組みを作っていました。

この共有というのは、時間的にも難しく、みんなが揃うとか、みんながわかりあうというのは、本当に難しいところだなと思います。門真の教育が、人とのつながりを活かすということ、キャリア教育を主眼として据えていくということなどで、大変わかりやすく、みんなが一致している、共有しているというのは、とても大事だと思いました。

次に、そろえて続けるということですが、何を一貫させるのか、何をそろえて続けるのかということです。まず、授業スタイルを揃えて続けるということですね。小学校と中学校で授業スタイルが違うのは皆さんの経験でもお分かりですね。でも、その中でも何か一貫してやれることないのかということを考えていくのです。

これは京都市全体でやったことですが、学習課題（めあて）とふりかえり（まとめ）をきちんと対応させる授業ということです。めあてとふりかえりを確実に対応させる学習、あるいは学習課題とまとめをきちんと対応させる学習です。その上で、学習課題は赤で囲む、まとめは青で囲むということをしてきました。これを全市で統一して実施しました。結果として、京都市は、全国学力学習状況調査の結果で、政令指定都市トップになりました。この取組は、実は秋田県がやっていたことでした。そして、新潟市もやっており、京都市もこれしかないと考えて、全市で徹底してやったわけです。結果として、先生たちの頑張りもあるのですが、結果が出てきたのです。こういうことも学校でそろえていくことがまず第一歩だと考えます。

次に、学習ノートを揃えて続けるということです。小中学校でノートの使い方がバラバラなのが普通です。実は、小学校の中でもバラバラなことがあります。1年生の先生が頑張っ

ということがよくあります。そうなるのではなく、1年生から9年生まで、きちんとノートの書き方などをそろえられないのかということです。

次に、話し合いのスタイル、話型の指導などを、小学1年生から、中学校3年生まで、系統的にそろえて続けていくということです。

次に発表スタイルを「そろえて続ける」ということです。ポスター発表のような方法を、小学生から高校生ぐらいまで、そろえて続けるようにしていきます。これは、「バナナの魅力」という見本です。これは、京都市にある堀川高校という、進学実績がよく京大や東大に入る学生が複数いるような公立高校でされていた実践です。この高校がやっていたポスター発表の形式です。「はじめに」があって、「本論」があって、という書き方をきちんと教えてもらう。すると、高校生の発表を見に行っても、小学生が理解できるようになります。こういう発表スタイルをそろえて続けるっていうこともできないのかということです。

次に、家庭学習を「そろえて続ける」ということです。家庭学習の時間については、小学校1年生、2年生、3年生、4年生って上がっていく時に、「学年×10分」という言い方をしたりします。しかし、中学校の3年生になったら、9年生ですから、90分でいいのか、ということですね。小中一貫校では、こういう家庭学習について、「家庭学習の手引き」などを作って、1年生、2年生、3年生、4年生といったように、だんだん上がっていきましようっていうことも伝えて、「そろえて続ける」ようにしています。

次に、「見方・考え方」を「そろえて続ける」ということです。今回の学習指導要領では、各教科における「見方・考え方」とかいうものが出されています。「しっかり見なさい」「しっかり考えなさい」と言っても、どうやって見るのか、考えるのかわからないということが多と思います。この「見方・考え方」をきちんとそろえて続けていければと思います。そのために、「気づく」「見つける」「似ている」「比べる」「つなげる」「分ける」「選ぶ」などの言葉が、資料の後ろに書いてあります。このように、子どもに働きかける言葉を「そろえて続けて」いくと、子どもたちは「見方・考え方」がわかってきます。

次に、学習規律や生活規律を「そろえて続ける」ということです。急に、中学校になった途端にベル着とか言うのではなく、小学校の低学年から中学年というように、きちんと「そろえて続けて」いくと、できるようになってきます。

このように、何をそろえて続けるのかを考えていくのが、3つめの「系統性」ということです。「系統性」のために、教育を縦につないでいく単元系統表といったようなものを作ったりしています。算数、数学なら、小学校1年生の領域や単元がこのようにつながっているというように、小、中学校で「系統性」を意識して授業していただけても、効果が違ってくるわけです。小学校3年生の先生が教えている時に、これは1年生、2年生からつながって、中学校のここにつながっているのだと、縦のつながりを意識できることが大切です。

「系統性」の2番目に、授業をつなぐということがあります。全国で教科担任制というのがかかり広がってきています。もちろん、メリット、デメリットはありますが、特定教科における専科指導とか、学級担任による授業交換とか、さまざまな形で、すでに実施されているかもしれません。門真市で言えば、軸として、キャリア教育がしっかりあるわけなので、この観点から、教科担任制に向かっているかもしれないと思います。教科担任制をどれぐらい実施しているかということ、理科とか、音楽とか、図画工作、家庭科などで、教科担任制にすることが多くなっています。どの時期に導入しているかということ、音楽が1番早くて3年生ぐらいからになっています。大体、5年生ぐらいで、家庭科などで導入していることが多くなります。3年生あたりから理科をやっているところも、だいぶ増えてきています。

「系統性」の3番目に、教科担任制とよく似ているのですが、「相互乗り入れ指導」というのを、小中一貫校では、よくやっています。これは、中学校の先生が小学生を教える、小

学校の先生が、中学生を教える、といったことです。「相互乗り入れ指導」を行うと、児童生徒の理解が深まるということのメリットがあります。また、中学校卒業ぐらいであればいいのなら、小学校では、こうやっていかななくてはというイメージが湧いてくるなどのメリットもあります。子どもたちは、中学生と一緒に環境に自分が飛び込んでみて、中学生はこれぐらいかという感覚がわかってくる。だから、中学校進学への不安が少し解消します。また、中学校に小学校の先生が教えに来てくれると、先生も子どももお互いのことをよく知っているので、すごくスムーズに乗り入れができます。

「相互乗り入れ指導」で大事なことは、子どもを多面的に見るということです。一人の小学校の担任だけで子どもを見ていると、見方が一面的になることがあります。40人のクラスのうちに1人や2人は、違う先生の方が合っているかもしれないということがあっても、おかしくないです。そのような意味でも、小中の先生が相互乗り入れしていきくと、子どもたちに対していろいろな見方をしていくことができます。小学校の担任の先生が、この子、なかなか大変だなんて思っていたとしても、中学校の先生が入ってきて、いや、この子にはこういういいところあるよ、と言ってくれることが起こります。このような多面的な見方は、子どもにとって幸せなことではないでしょうか。

それでは、どれぐらい「相互乗り入れ指導」をしているのかということです。小学校教員が中学校に乗り入れることは、結構難しく、あんまりできていないのですが、数学で比較的多いかと思います。数学の複数指導をやっているわけです。中学校の担当の先生がメインで数学を教えて、わかりにくいところを、小学校の先生が補助で教えるといった形式です。小学校からの乗り入れは、免許の問題もあって、なかなか難しいようです。一方、中学校の先生が小学校に乗り入れる場合は、算数も理科も音楽も体育も外国語活動も、いわゆる専門性のようなことを言われる教科などやりやすいということがあります。

難しい理由は、中学の先生は、やっぱり文科省の規定通りに人員配置されているわけで、普段持っている授業のコマ数以上にコマを持つことになってしまうということです。だからと言って、国の基準を超えて人はなかなか配置されないの、結果で言うと、中学校の先生の負担が増えるといったことになってしまいます。これは、ずっと課題として出ている問題です。

終わりにになりましたが、「人は人を浴びて人となる」という言葉があります。「人は人を浴びて人となる」ということは、私たちが生きてきた中で、皆さん方もそうだったと思うのですが、何らかの人の影響を受け、人を浴びながら育って行って、ようやく人となってきたのだということです。この「人は人を浴びて人となる」という言葉は、まさに「子どもを人のつながりの中で育てる門真の教育」のことだと思います。

これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

## 会長

ありがとうございました。今の小中一貫のお話の中には少し専門的な内容もあったような気もしますが、基本的には、メリット、良さをご理解いただけたと思います。それから、最後の、「人は人を浴びて人となる」というのは、人との「つながり」にも関係していると思いますので、門真の方向性とも関連するのではないかと思います。

ここからは、門真の学校教育の基本的な考え方になりますので、ご意見、あるいは、ご質問等ありましたら、議論をして、次に移りたいと思いますが、最初の門真の教育について、つながりを中心にして、キャリア教育、最終的には、人としての自立を目指していくという、考え方がありました。西先生の小中一貫教育のご発表とあわせて、ご質問、ご意見等があれば、自由にお出しいただきたいと思います。いかがでしょうか。

## 委員

1つあります。「異文化とのつながり」というものを入れてはどうなのかなと思ったんですね。もっと具体的には、西先生がおっしゃった、フランスの話。要するに聞いた話なんですけどね。いろんな国の人を集めて、自分に点数つけたら何点ですかと聞くと、日本人は60点とか70点だそうです。ところが、ヨーロッパの人は90点とか、下手したら100点という人もいて。この違いなんだろうかなと思ったら、先ほど先生がおっしゃった、短所の捉え方。文化の違いは当然。大国と小国、島国で物事の捉え方が違う。向こうは大国で、やっぱり大極感だったものの見方されますよね。どちらかと言いますとね。日本は島国ですから、平行でものを見る、向こうは上からものを見る、この大きな違いかなと思ったんです。

小学生に対して島をかきなさいって言うと、日本の小学生は、山をみたいな、島を描いたり、海があって、山を描いたりします。一方大国は、上から見ていますから、平面で島の上から見た図を描く。捉え方が違う。そういった意味では、文化交流と言いますか、異文化を学ぶということも1つ大事なことじゃないかなと思うんですね。

## 会長

いかがですか。ある意味、あの横のつながり中に、地域までが入っていますが、それをもっと広げて、国際的になっていくところまで考えていくことかなと思います。

## 委員

プラスで入れたら面白いのではないかな。

## 委員

今、地域と言ったけどね、教育委員会がどういう風に思っているのか知らんけども、地域が学校に入りづらくなっている。建物が老朽化して潰すのは仕方ないです。ただ、潰した後、そこにフェンスなどをするのではなく、そこで子どもたちが昼休みなどに遊べるようにした方がいい。

我々は20年間、門真小学校で植物とか花とか、種などを撒いて育てていた。その時、子どもが来て、木の目とか折ったりしたので、叱ったら2度としなくなった。それが、今では公園に来て、桜の花にいたずらをしていたので、注意しても知らん顔して、まだやるわけだね。だから、やっぱり地域はね、ある程度学校に入らんと。だけど、今入りづらいんですけどね。子どもが危険なことをしているとき、あっと思って注意するけども、学校に入られへんですよ。インターホンになるところに行った時には、もうすでに怪我しているかもわからん。

地域の10人ぐらい男の子が、昔埋めたタイムカプセルを掘りに成人式の帰りにたまたま学校に行ったら、プールを解体して建替えた際に掘り返したのか見つからなかった。

そんな建て替えるようなことを子どもが埋める時はわからへん。解体する時に、業者に対して、申し入れをしてなかったのか。ちょっと耳痛いかわからんけども、これからが1番重要になってくるんじゃないですか。門真小学校でも、地域との交流はほとんどなくなりました。芝生の整備でつながっているぐらい。それ以外のつながりはほとんどなくなりました。

## 会長

横のつながりの図を出していただけですか。

## 委員

例えば緑とか花の名前とかが分からないとします。そこで、休み時間や昼休みの時間に子どもたちが、地域で詳しい人に聞く。このように子どもがのびのびと育てば、不登校もだいぶ減るんじゃないか。

## 会長

先ほどの委員のご意見は、地域レベルじゃなくて、人とのつながり、横のつながりっていうのを、もっと、海外まで含めて、異文化まで含めて、捉えるべきではないかっていうご意見ですね。

それと今ご発言された委員のご意見はつながり、つながりと言っているけれど、実際、学校と地域は今、つながっていない状況が出てきている。それをどうするかという、目標として「つながり」を設定することは必要ですし、あわせて現状の課題をどうやって解決していくかということも必要になってくるということだと思います。つながりの言葉だけではなくて、実態としてもちゃんとできるように、ハード、ソフト含めて考えていく必要があるということです。タイムカプセルは、ある意味、時間とのつながりで、縦のつながりという考え方にも、通じる場所があると思いますので、そこら辺も少し検討の余地があると。つまり言葉だけでなく、実体を伴うことが重要であるということですね。

## 委員

私は大和田小学校のある二中校区ですが、学校によって差があるんですね。地域差がある。校長先生も年に2、3回お話しすることがありますけども。

## 会長

温度差については、先ほど西先生が言われたように、学校間の温度差を無くすように、学校同士のつながりということが必要になってくると思います。それで、情報をお互いやり取りしながら、いい事例に学んでいくっていう。

## 委員

そもそも、この図の人のつながりの真ん中は学校前提ですよ。そもそもその観点を修正していく必要があるかなと私は思います。学校を中心に考えていくというのは、学校が地域にどうつながっていくかは確かにそうなんですけれども。子どもたちとの人のつながりを活かしたものを学校の教科の中に取り込んでいくというような観点でもっと動いた方がいいのではないかなと思うんです。そういう意味では、青少年指導員がやってはるようなことも学習時間として捉えて、組み込んでいくとか、他の個人的にやっていることの学習時間として組み込んでいくというようなもうちょっと広い視野での観点を持っていた方がいいのかなと思います。

## 会長

ぱっと見た時に、なんか社会っていうのは街中のようなイメージっていうように捉えがち。もうちょっと学校という領域を明確にしたほうが良いということですね。

## 委員

今、コミュニティースクールが言われているのは、そこを改善していくためです。でも、実際、子どもたちの生活というのは、学校だけでなく、社会につながっているわけですから。幼稚園とかは、社会的な地域の経験を保育の中に全部取り込んでいこうとするんですよ。子どもたちから聞いて、お祭りあったよとか、ものを作るお店屋さんごっこしてみよう、

屋台のお店屋さんごっこしてみようとかということをしている。学校からというところでは、狭いような気がするのです。

それともう1つ、学習指導要領の影響もあると思います。学習指導要領の前文の中には、基準を大綱的に示したものはっきり書いているんですね。私がここに呼ばれているのは、門真市就学前教育・保育共通カリキュラムというのを作ったからだと思っています。私も幼稚園関係のメンバーの1人で入っていた訳なんです。これを作る時に、最終的には、なかなか書き込めなかったんですけども、最初はそれぞれの子どもたちの育ちの大まかな目標をずっと書いたんですね。これをもう少し充実させようということで、現場の先生に入ってもらおうと、もっと細かいことがいっぱい入ってきちゃったんですよ。細かいことは各園によって違いますし、私たちは、今言ったように、その社会で子どもたちが経験したことを保育の中に取り入れようとしているから、どれを取り上げるかは、園によって違うんですよ。そこに細かいことが入ってきちゃうと、それをやったか、やらなかったかということになってしまう。その怖さは、あの学習指導要領にはあると思う。本日ご出席の学識の先生と就学前カリキュラムと一緒にやっていただいて、先生の発案で、発表会をやったんです。けれども、どうしても運動会のこれをこういう風にしましたという形での発表が多いんですよ。それがちょっと違うと思っています。その時に、やっぱりその点についての認識の仕方というのが、できたものだったら、書かれていることをやればいいのかという風になってしまっているというところを、全員が意識していかないと、いけないかなと思います。

## 会長

私の理解で言うと、例えば、キャリア教育指針の中で結構細かい、第1学年では何をやるみたいな話があったけれど、あんまり細かく定義しない方がいいってことですかね。

## 委員

そういう意味じゃなくって。細かいのは別に構わないんです。例示として捉えて、こういうこともできるとしてもらおう。そこから上げられる力を学校が持つ必要がある。考え方だけ全校で共通に持って、実践についてはもっと幅の広いやり方をそれぞれ工夫していった方がいい。だから、当然、地域と関わるというのは、どういうところで地域と関わるかっていうことを考えなければならないから、地域の人を呼んで発表しましたとか、お話を聞きましたでは、あまり意味がないのではないかなと思います。

## 委員

門真市版のキャリア教育モデルプランは大変すごいな、面白いなと思っているんですけども、研究視点っていうか、これから、指定校みたいなところが出てくるのかっていったところ、小学校の2年、3年生、4年生のあたりでは、地域との関わりが、見えるカリキュラムになっているんですけども、特に小中一貫ということ考えると、6年生、中1のところっていうのが、まだちょっと意識したカリキュラムにすることができるのかなと思いますので、教育っていう観点で、地域と一緒に作っていくっていう部分で、この6年生、中1に特に、重点的にしていこうとか、研究しているとか、考えがあるんだったら、ぜひ見学しに行きたいなと思っていますので、また教えてください。

## 会長

私から1つ。西先生に、一貫教育の良さとか、どんなことやるのかというのは、教えていただいていたんですけど、一貫教育というものをより良いものにするためにどんな条

件が必要なんでしょうか。例えば、校舎は同じ方がいいとか、ハード・ソフト含めて、より良い一貫教育に向けての条件みたいな。今後、学校再編を考える際に、そこらへんが重要になってくると思うんです。そういう意味で、よりよい一貫教育を実現するためにどんなことを考える必要がありますか。

### 副会長

実際には、先ほどの定義のように、小中一貫教育は、校舎が離れていても、理論上は可能です。ただ、やはり一体的な校舎の中で実施する効果は大きいと思います。理由の1つは、教職員の問題です。先ほどお話しした共有とか交流といったことが本当にしやすいです。もう一つは、子どもの問題です。小学生が中学生になっても同じ校舎にいますから、子どもたちも先生に対して、前からいる先生というように安心して見ていけるということがあります。また、小学校と中学生の交流がしやすくなります。1年生と6年生といったような交流はよくやりますが、近い学年の交流はあまりしないです。学年を飛ばして交流することが多いです。例えば小学校5年生と中2ぐらいの交流という時にも、校舎が一体であればもっと容易にできます。

ただ、施設が一体であると、運動場の使い方など、先生たちは考えることも多く、大変なこともあります。それでも、小中の子どもたちが一緒になると、中学生の子たちが配慮しながら、運動場を使っていたり、その中学生と小学生が一緒に活動していたりというような、いい姿が見られました。

まとめると、やはり小中一貫教育は、施設一体でやっていく方が、効果とか、子どものいい姿は見えやすいと思います。

### 会長

理想ではありますが、簡単に小学校と中学校を1つの建物にまとめるっていうのは難しいといったこともあります。そういう意味で、例えば1中、2小ですよね、1つの中学校区に2つの小学校があって、そこで一貫教育をやるというような、施設は必ずしもくっついてないけれども一貫教育をやる場合だと、どういうことを考えればいいですか。

### 副会長

京都でもそういうところはたくさんあります。もちろん、先生たちがいろいろなことを共有したり、離れていても入り込み指導をしたりするのですが、難しいのは難しいです。そのためには、みんなが同じ中学校区として子どもたちを見ていくという考え方が大切だと思います。私が教員になった頃は、小学校の先生が、中学校の先生に対して、もうちょっときちんと指導してくれたら、あの子はもっとしっかりできたのに、という言い方をしている、中学校の先生は、もうちょっときちんと小学校で教えといてもらわないと困る、みたいなことを言われることがよくありました。中学校区全体で子どもを見ていく考え方ができると、そんな言い合いをしている意味がなくなります。小中一貫教育をやっていく中で、中学校区全体で子どもを見ていく雰囲気というのが、明らかにできてきています。自分事として自分の中学校区っていうことを考えていくが大切だと思います。

### 会長

そういう意味では、やっぱり中学校区単位できちんと組織作りや運営を進めていくと、必ずしも施設が一体になってなくてもできることは多々あるということですね。

### 委員

お金がいるし、3つの学校があるのを1個にしないといけないこともある訳ですね。どこへ建てるか。門真は道路も狭いし、面積もあんまりないんですよ。

ただ、日本一素晴らしい街ですよ。日本一最高の街やけども。

## 委員

先ほど、委員が言われたことにも関連すると思うんですけど、私は西先生の小中一貫教育の定義の中の情報交換、交流、接続のキーワードを挙げておられる中の情報交換っていうのが、1番教員間で大事な部分やと思うんですね。同じ学校であればやりやすいけれど、学校が離れているとどうなんだっていうことでは、ネックになる。同じ敷地になんないという場合に、そのことを考える上でのもっと大事なことが、やっぱりこの情報交換が何なんや、何の情報交換をするのかっていう時に、先ほど先生もおっしゃったように、方法論とかやり方とかにとらわれてしまいがちけども、子どもたちのいわゆる子ども観というのが先で、どんな子どもに育てようかという子ども観の、全学校の統一感が大切。1人1人の子どもを理解するためにどうするんだという子どもを理解。子どもを真ん中において、子ども理解のあり方とか、その上に立った教育観、教育のあり方ですよ、門真全体の教員が1つになっていく。

敷地内にあろうがなかろうが、移動があってもなかろうが、やっぱりそこをもっともっとこう、話し合ったり、考え合ったり、研究、研修し合うということが大事で、いろんな形が出てきたらその形をやっつけていこう、やっていくという方法論ばかりが現場の教員たちが行って、なぜそれをするのかとか、どう自分のところではやろうとするのかというところには教育観というものが入ってくると思うので、その話し合いがまず大事かなっていうことを思いました。

それから、西先生の一貫性について、何を一貫させるのかっていうこと。小学校から中学校までの先生方が指導の方法の形にとらわれると、先ほどのフランスの子のような発想は生まれません。そこは先生がしっかり持つとかなないと。おっしゃっていることはこの通りなんだけれども、やり方だけを追っていくと、私はそろえた教育が結果的に個性豊かな子どもに育つかというあたりでは極めて注意しないといけないと思っています。学校の現場って、ついつい、こうモデルにそろえようということで、形だけが同じようになった授業になっていく。子どもたちも素直にそれにそろっていきこうとなつて、面白さに欠ける怖さもあるので、やっぱりこれも教育感っていうものがどうかっていうことを確認した上での、そろえるということかなと思って聞いていました。

## 会長

要するに、形ではなくて、精神だということですね。

## 委員

先日、日本教育新聞という教育関係の方が、読んでおられる新聞があるんですけども、その新聞のコラムにすごい衝撃を受けたんですよ。「最近、子どもたちの見方が、自分たちでできる」というように変わってきているらしいと書いてある。幼稚園の教育要領は、平成元年に、子どもたちの主体的な活動をさせるようにと変わっているのです。もうすでに元年の段階で。それまでは、学校の教科的なものが出ていて、それをどう配列していくかなど系統性とか内容の話だったのですけれども、ガラッと変えて子どもたちの主体性を促して育てていきたいと思います。その1つが、心を揺さぶられる心情の問題。ちょっとやってみようと思欲、やってできたという態度。この心情や意欲・態度を大きな“ねらい”として、子どもたちに関わってくださいというように変わっているんですね。子どもたちは能動的な



力を持っているというのが出ているのに、令和になってもまだこの段階なんですという方がやっぱりいらっしゃる。ということは、今、委員が言われたように、門真市の子どもたちをどう見るのかということを中心にきっちり整理していく必要あるのかなと思いました。幼稚園の例なんかですと、4歳で、ごく普通の子が、トラブルの解決としてすごい手段を使っているなどというのがあったりします。そういうことを考えていった時に、やっぱり子どもたちが自分で色々考える場面をどう作っていくかということを中心として、学習指導要領の大綱の方に持っていけばいいと思うのですよ。単元にしても、9年間の間で、同じようなものは、さっきも出てたようにつながっていますよね。これをどこかの段階でまとめて、この単元のねらいは何なのかということを中心にきっちり押さえられる時間を作ること。そして、その中に子どもの主体性を生かしていきけるような活動を入れる。そうすると、先ほど言うておられた、時間がないということがだいぶ減ってくるんじゃないかなと思っています。

## 会長

ありがとうございます。教育論が交わされていて、このままずっと行けそうな気がしますけど、後半部分もありがとうございますので、門真の教育をどうするかということは、学校再編のベースになる考え方になりますので、今日確定するというわけではなくて、これから議論を展開しながら、学校再編と、それをどう整合させていくのかということを考えていきたいと思えます。ひとまず今日はこれぐらいにして、次の、段階に進みたいと思えます。

教育委員会から、門真の具体的な検討に向けてということで考え方についての説明をお願いします。

## ○具体的な検討に向けて

### 事務局

今いただいた意見については、事務局で整理し、今後、検討させていただきたいと思えますので、よろしくお願いします。

それでは、後半部分、案件3資料5具体的な検討に向けてについて説明をさせていただきます。まずは、門真市立学校の編成について、説明をさせていただきます。ここからの案件については、いよいよ、次回から本格的に学校のあり方について議論していただくところで、知っておいていただきたい情報についてご説明をさせていただきます。よろしくお願いします。

それでは、変遷ということで、門真の学校の歴史について、遡っていきたく思います。学校ができ始めた頃、約150年前に遡りたいと思えます。門真の学校は、明治5年、1872年に古川橋にある願得寺というお寺に、小学校が作られたところから始まります。この小学校が、現在の門真小学校、それから大和田小学校の元になっているということです。そして、明治11年に、1878年に、門真小学校の木造平屋建て校舎が完成しました。写真に写っているものです。子どもたちは、当時、もちろんランドセルはありませんので、風呂敷を使って、着物を着て、草履を履いて、通学をしていました。

それから、昭和37年、1962年に北小学校が開校するまでの間、小学校は、この旧村の門真小学校、大和田小学校、四宮小学校、二島小学校の4校だけでした。こちらは門真市における人口の移り変わりを表したグラフです。1960年以降、高度経済成長期ということで、それも相まって急激に人口が増えました。特に60年から70年にかけての増え方は、当時日本で1番だったと言われております。

子どもの数をみていきます。1番多かった門真小学校を見ると2176人、54学級ということで、6学年を、54学級で割ると9学級ある。また、 $2176 \div 54$  をしますと、40.29になる

ということで、9学級あり、それが6学年、しかも、あの1クラスが40人規模ということで、当時、そのぐらいの人数が在籍していたということです。こちらのスライドは、体育館割り当てなんですけれど、大体、学校では、1クラスとか、学年合同であっても、2クラス、3クラス、多くてもっていうぐらいなんですけど、当時は、6クラスで1クラス40人規模、つまり240人で体育館というところでやっていたというところで、どうやられてたかなと個人的に興味ありますが、仮にこの当時の環境で今求められてるような教育をするのはちょっと難しかったのではないかとということが見て取れるかなと思います。

そして、冒頭のふりかえりでも説明があったかと思うんですけれども、小学校では1979年、中学校では1985年をピークとして児童生徒数がどんどん減りまして、現在は、1980年、昭和55年の約27.5パーセントしかないというような現状でございます。ここまで、子どもの数を見てきました。

ここから、統合や分離の変遷について見ていきたいと思います。まず、小学校が分離していった様子を見ていきたいと思います。まず、1872年に、門真小学校、大和田小学校が誕生し、その後、1874年に四宮小学校、1875年に、二島小学校が誕生しました、先ほど、申し上げました、4つの村の小学校です。その後、先ほどもお伝えしたように、1960年代頃から急激に人口が増えまして、旧村の最後に開校した二島小学校の開校から約87年後の1962年に、門真小学校から分離する形で北小学校が、1965年に門真小学校、大和田小学校、四宮小学校から分離しまして古川橋小学校が、そして、翌年の1966年に北小学校から分離しまして中央小学校が誕生しました。そして、さらに、その翌年の1967年には四宮小学校から分離し、南小学校ができました。

さらに、学校分離が加速します。1970年には、中央小学校から分離し、浜町小学校、大和田小学校から分離し、沖小学校が、その翌年、1971年には、門真小学校から分離し、速見小学校が、それから、大和田小学校から分離し、上野口小学校ができました。さらにその翌年、1972年には、四宮小学校、南小学校から分離し、脇田小学校が、その2年後、1974年には、四宮小学校から分離し、北巢本小学校が、そして、1976年に沖小学校から分離し、五月田小学校、南小学校から分離し、水島小学校ができました。最後に、1983年に四宮小学校、脇田小学校から分離し、東小学校ができました。ここまでが学校分離をしていた様子です。

見ていただいた通り、旧村の門真小学校、大和田小学校、四宮小学校から、学校分離が進んでいったというところが見て取れるかと思えます。一方で約150年の歴史あります二島小学校については、これまで1度も、分離等をしてきてないという様子が資料から見て取れるかというように思います。

続いて、小学校の学校統合です。人口の増加、子どもの増加によって、どんどん学校の数も増えていったんですけれども、1980年を境に徐々に子どもの数が減少して、学校の統合が検討されてきたというところがございます。

門真で最初の統合は、南小学校と水島小学校です。この2校が統合して、2005年に砂子小学校ができました。その後、中央小学校と浜町小学校が統合して、2008年に浜町中央小学校が、2012年浜町中央小学校と北小学校が統合して、現在の門真みらい小学校が誕生しました。

そして、今後についてですが、第四次の答申の内容を踏まえまして、統合を進めていきます。まず、2024年、今年4月、約2ヶ月後となりますけれども、脇田小学校と、砂子小学校が統合して、水桜小学校ができます。その2年後、2026年、令和8年に、先行して統合して統合した、この水桜小学校と第四中学校が統合して、門真市初となる、1年生から9年生がともに学ぶ義務教育学校である(仮称)水桜学園が開校予定でございます。また、2028

年、令和10年頃に、四宮小学校と北巢本小学校の新校舎が完成予定です。ここまでが、小学校の学校統合の様子でございます。

次に中学校、見ていきたいと思えます。門真中学校から始まりまして、一中に名称が変わり、最初は1校だったんですけども、このスライドのようにですね、中学生ももちろん増えていきますので、どんどん校数も増えていったということでございます。そして、統合に関しては、2012年に、第一中学校と第六中学校が統合しまして、門真はすはな中学校となっております。なお、今後は小学校のところでも触れたんですけども、第四次答申に基づきまして、第四中学校が、小学校である水桜小学校と統合して、2026年、(仮称)水桜学園となる予定でございます。最後に、これまでの審議会も踏まえまして、このような形になります。点線より上が第三次答申までを受けて、統合していった学校でございます。一方、下が、第四次答申を受けて統合予定の学校でございます。なお、統合ではないのでここには記載しておりませんが、第四次答申は、もう1つ具体的提言がございまして、それが、東小学校区の江端地域についてです。五中校区なんですけれども、距離等の関係から、現在、中学校に進学する時に、五中ではなく、近くの中中に通学しています。こちらについては、地域との意見交換会や保護者等からのアンケートをいただくなどし、地域・保護者等とお話を重ねまして、東小学校区は、第五中学校区とするが、江端地域については、新しく設置する(仮称)水桜学園への通学を開校時や小学校の就学時に選択できるなどといった旨の方向性を示しております。

少し話が逸れましたので戻します。スライドとは別の、A3の折ってある資料が入ってあるかと思うんですけども、そちらを見ていただけたらと思えます。この資料は、これまでの変遷を図にまとめたものでございます。特に、旧村の先ほども出ております4つの小学校については約150年ほどの歴史がございまして。これから学校の再編等をご議論されるかと思うんですけども、その上で、子どもたちをよりよく育てるには、学校や保護者だけで育てていくことは、困難ではないかと考えております。やはり学校や保護者だけでなく、学校を支える地域や地域コミュニティというものの支えが非常に大切であると考えております。その上で、このような地域に根付いた長い歴史のある学校もございまして、そのあたりも踏まえた上で、ご検討いただければというように考えております。

## 会長

ありがとうございます。続けて説明をお願いします。

## 事務局

私の方から残りの資料についてご説明をさせていただきます。資料6中学校区の基本情報をご覧ください。こちらは、今日の説明に使うというよりは、今後皆さんが議論をしていただく上で、振り返っていただく、参考資料として使っていただけたらと思って作らせていただきました。めくっていただくと、まず、第二中学校区と書かれたページが出てくるかと思えます。グラフの表の見方だけご説明させていただきますと、第二中学校区には、学校が何校あるのかだとか、学校の位置、それから、住所、面積、下の方に行きますと、児童生徒数の予想推移ということで、第二中学校であれば大和田小学校、沖小学校、上野口小学校の3校が載っているかと思えます。それぞれの学校の児童生徒数が今どれぐらいで、何クラスあって、どういう見込みになっているのかというのを、表にまとめたものでございます。注目していただきたいのは、一つ目のページの、下半分です。下半分の右の方に学級数の予想推移と書いているところです。色がついているところ、ついてないところが、お手元の資料見ていただいたらわかると思うんですけど、中学校であれば、4学級未満、つまり3学級以

下になっている学年については、色をつけさせていただいています。小学校については、学年、1クラスのところに色をつけさせていただいています。色がついてないところは、小学校は2クラス以上あるか、中学校は、4クラス以上ある学年ということで、今後、色が塗っているところは、いわゆる、学級数が、少ない、規模が小さいということを、表しています。そのような色が多くある校区、あるいは、ない校区といったようなところで見比べていただいたりだとか、1つの課題として、こういう部分があるんだなっていうように見ていただければと考えています。

右側のページは、各学校のめざす子どもと学校教育目標、通学距離です。各学校の1番遠いところは、どれぐらい遠いところから来ているのかというようなことを各項目にまとめておりますので、今後、各学校が話の中で出てきた際、参考に見ていただければと思っておりますので、お手持ち資料として、次回も持ってきていただければありがたいと思っております。もう1つ、資料7についてです。こちらも、参考資料ですので、今後、参考として使っていただければと思ひ、作っております。学校位置図です。小学校、中学校の場所と面積、それから、校地の広さを合わせて見ていただけるかと思ひます。ある程度、今の校区と合わせた形で、作成していますので、配置と、距離感、あるいは面積の広さあたりを見ていただくのと同時に、少ないとか単学級とか古いとかいうマークがついているので、それも参考にしていただければと思ひます。1枚目は、現状です。今年度までの状況です。2枚目を見ていただくと、2枚目は、第四次答申の結果を載せたものということで、水桜学園と、四宮小学校、北巢本小学校の統合の部分について、先に進めたような形にしています。3枚目です。前回、第1回の審議会の際、門真にある幼稚園、保育園、こども園の情報を載せたもので検討したいという意見をいただいていたかと思ひます。公立の保育園にこども園、私立の保育園、こども園、私立の保育園、公立幼稚園など形態は色々ありますけれども、門真市内にある、幼稚園、保育園、こども園、小学校、中学校を全部落とし込めたという図でございます。これも今後議論していただく際の参考として、使っていただければなと思ひます。

## 会長

はい、どうもありがとうございます。以上ですね。ちょっと早足だったんですが、資料5、6、7、それからA3の折ったもの2枚、これが、これから、門真市の学校の再編を考えていく時の基礎データになります。これを、基にして、議論を進めていきたいと思ひますので、毎回お持ちいただいて、この資料5、6、7これを元に、検討を進めていきたいと思ひます。

先ほどものご説明で、門真市の学校の、例えば、児童生徒数、それから、各中学校区がこうなっていて、そこに小学校がある。また、学校が増えていくときのプロセスと、それから統廃合で減っていくときのプロセス、幼稚園、保育園との関係も含めて、ご理解いただけたと思ひます。これを今後どうしていくのかの検討をしていく予定です。その時に、むやみやたらにこれはおかしいから変更しようということではなくて、基本的に合理的な考え方に基づいて、学校の再編を考えることが重要になってきます。その再編に向けての考え方が、資料8に整理されてますので、ご説明いただいて、最後にその再編の考え方について検討してはどうかと思ひます。

## ○学校再編にあたっての基本的な考え方について 事務局

では、続けてですね、案件4、資料8になります。学校再編にあたっての基本的な考え方について説明をさせていただきます。この後も含めまして、今後の審議会では学校のあり方を

検討していただく上で、大切にしていきたいと思う基本的な考え方について、事務局でまとめさせていただきました。本日は、お時間の関係もありますので、一旦説明をさせていただいて、ご意見あれば、また次回以降、修正したものを検討して改めてお示ししたいと思っておりますので、その旨、ご了承願います。

まず①が、これからの教育を実現するための検討というところでございます。第1回審議会で説明させていただきました通り、現在、令和の日本型学校教育の実現が求められております。その上で、学習スタイル、学び方と合わせて、自分にあった個別最適な学びであったり、友達とやっていく協働的な学び、これらを実現するために学習環境が重要になるのではないかとこのところでございます。多様な他者と連携する上で、人とのつながりというところが重要です。その上で、第四次答申で示されました、門真のめざす教育の、人とのつながりの視点、これを、今後の審議会でも継続して大切にしていきたいと考えております。縦のつながりや、将来の自分とのつながりなどを、より子どもたちに感じてもらえるよう持ってもらう上でも、この小中一貫教育の視点というのが重要になるかと思っておりますので、その視点を持って、検討をしていただけたらというように考えております。

次に、②です。児童生徒数を考慮した検討です。児童生徒数については、今後も減少する見込みでございます。一定数の子どもたちがともに学び、異学年との縦のつながりや同学年などとの横のつながりなどの多様なつながりの中で育つ環境を作るという、人とのつながりを大切にしている中では、この児童生徒数というところが重要になってくるかと思っております。その環境整備のためにも、単学級になっている、また、将来的に単学級になることが見込まれるなどについてはですね、速やかな検討が必要なのではないのかなというように考えております。

③のところでは、老朽化した、校舎への対応です。門真市の学校については、ほとんどの学校が、築50年を経過しております。これからの教育を実現するために、そして、快適で楽しく過ごせる学校に過ごせるためにはですね、この学校施設の築年数であったり、過去の大規模改修等の、状況等を考慮した検討をお願いしたいというように考えておりますので、ここに載せさせていただいております。

④が、今後のまちづくりを考慮した検討です。今後、前回動画も見ていただきました通り、大きく門真のまちづくりが進む、予定でございます。推計では読み切れないほど、まちが大きく変わるとしているというところで、子どもの数が少し読み切れない部分があるのかなと思っております。この点も、学校のあり方を考える上で踏まえていただけたらどうかというように思い、載せさせていただいております。

最後が、⑤の学校の編成を踏まえた検討です。先ほど説明させていただいたものです。門真市の学校は旧村の小学校から分離してきたというような歴史がございます。子どもたちをよりよく育てていくには、学校や保護者だけでなく、地域の方であったり、地域コミュニティ、これが必要不可欠であると考えております。その上で、これまでの歴史であったり、再編の経緯なども含めて、どう分離してきたのかであったりですとか、これまでの審議会で議論してきたことなどもですね、ご配慮の上で、検討を進めていただけないかというように考えております。以上が学校再編にあたっての基本的な考え方についてでございます。

## 会長

ありがとうございました。基本的な考え方、これはあくまでも、たたき台ですので、今後の検討の中で、変更、加筆、修正を加えていきたいと思っておりますが、こういう考え方で、学校の再編をこれから具体的に考えていくということになります。これについて、ご質問、この考え方が皆さんで共有できないと、学校再編にはうまく繋がっていきませんので、これに関

して、ご意見等ございましたらいかがでしょうか。

## 委員

僕も、つい最近まで小学生、中学生だったので、老朽化した校舎への対応、そこに関してはその通りだなと思っています。子どもたちや働く先生の気持ち的にもきれいな校舎がいいと思います。この基本的な考え方で準備していけたらなど。

## 委員

先ほど教育論の話をさせていただきましたけれども、実は、子どもの人権宣言ありますよね、国連で採択した。これについて、日本はすでに4回も、改善の勧告を受けているのですよね。その1回目、2回目、3回目までは、学校制度を変えたほうがよいというのは出ていました。4回目は、学校制度を変えるっていうのはなくなっているのですけれども、少し細かい視点で、子どもの意見表明権・参画をもっとしっかりやりましょうといったことが、具体的に上がってきています。そのことから考えていくと、やっぱり、今までの学校の教育体制というのは変えないといけないと思います。それは、先ほど言ったように、学習指導要領の各論にとらわれるんじゃなくて、もっと総論的なところをやればいい。単元についても、1つの単元の中の細かいことやるとはなくて、その中心課題になることを時間をかけて、自分たちで、見つけていくというような自由進度学習のような形が今どんどん出てきています。門真市の教育の中でのやり方というあたりもしっかり、考えていかないと、多分、審議会の本来の目的としているところに沿っていかないのではと思っています。それともう1つ、そういう意味で言いますと、学区制も1度考えてみる必要あるのかなと思います。学区をなくした時に、学校がランク付けされることも起こりえますよね。それを復元することが、それを乗り越えることをどうするかって、かなり、丁寧にやっていかないと、ちょっと色々問題出てくるかなと思いますが、単に学校をくっつけただけで終わるのであれば、メリットが出てきませんし、今度、水桜学園が頑張っただけでやればやるほど、他の学校でなんでやねんっていうことが出てくる可能性があるんで、ちょっと全体のこともしっかり考えておく必要あるかなと思います。

## 会長

そういう意味では、中学校区単位とかに限定せずに、もう少し学区そのものも変更可能なような考え方を取るっていうことですね。

## 委員

強い希望があれば、校区外からも通えるといったようなことです。限度はつけることは必要だと思うんですけども。

## 会長

ちょっと基本的な考え方には書きにくいですけど、そういうことも心に留めながら検討するということで進めていきたいと思っています。例えば①の、令和の日本型学校教育と学校再編がどうつながっているのか、結構難しいところかと思っています。それから、門真のめざす教育と学校再編の関係も見えにくいかもしれません。皆さんが通われた学校は、教室がずっと並んで廊下でつながっており、あと、何もなし。別に特別教室があって、図書室があってというような学校だったと思うんです。ところが、この令和の日本型学校教育は、そういう、教室の中で先生が教壇に立って、子どもに前を向かせて、先生が説明したり質問したりしながら学んでいくという一斉形式ではない、子どもたちが自分たちでいろんな資料を調べるだと

か、グループになって子ども同士がいろんな話し合いをしながら、授業を進めていくことを想定しています。いわゆる教室でお利口さんに座って、授業をちゃんと聞いて理解するっていうやり方とは全く違うことを、令和の日本型学校教育も門真のめざす教育も考えているんです。そうすると、今の校舎では、絶対にこういう教育は実現不可能です。だから、校舎を変えなくてはならない。そのためには、③にあります老朽化した校舎から先に手をつける必要があります。ただ、②で子どもの数が少ない学校の校舎を単独で建て替えるとなると、費用がかかります。特に、建設費用は高くなっていますので。1つ1つをきちんと建て替えていくことは、財政的に絶対に無理です。だから、そういう意味で、効率的に学校を新しいものにつくりかえていく。それからつながりっていうのを生かすということを考えると、学校の子どもの数も考えなくちゃならない。児童生徒数の規模が小さい学校をそのまま残すということではなくて、少しまとめて大きくすることによって、教育効果も上がるし、新しい学校も作りやすくなる。そういうことも考えながらやっていくということで、①のために、③や②、それから、当然、④っていうのも考えていく必要がある。だから、めざしているのは①です。そしてこれを実現するために、学校をどういう風に再編していけば、新しい校舎で、つながりのある門真の教育が実現できるかっていうことを考えていただくということがこの審議会の趣旨です。というのが、今日ご理解いただくというのが重要なのですが、その点に関して、何かご質問とかご意見ありましたらいかがでしょうか。

## 委員

ららぼ一とのところに新しいマンションが出来ているが、そこに子どもがいる場合、速見小学校区になってると思いますが、例えば門小学校区とかにするのは出来るか。神社の関わりなど色んな状況があると思いますが。通学路とかを考えた上で校区割りを考えるのがいいのではないか。

## 委員

子どものこと1番よく知っている方が、子どもの活動の範囲内をもう1度再構築していくという風に考えているのは、すごい意味あること。それと同時に、西先生が最初言われた不登校の増加であるとか、自己肯定感の減少というのは、やっぱり人といっばいつながることで、おっしゃってる通りなんですけど、これをやろうとした時に、今までと同じ人間関係をそのまま引っ張り込むような学校であつたら、ちょっとしんどいかなと思います。その辺りのことを学校の先生の方がよくご存知だと思いますし、どうしていったらいいとか具体的な方策とか持っておられるんで、学校の先生がそこをしっかりと、意識して関わられることは1番大事かなと。教育委員会さんには申し訳ないけども、行政的にこうというよりも、門真の子どもたちのためにどうしていくかっていうあたりをやっぱりしっかりとここで話し合っていたらいいかなと私は思います。

## 委員

四宮小学校に関する事なんですけども、1970年代頃みんな一緒に学校へ行くんやっという、インクルーシブ教育に関係する本の中に、障がいのある子どもが、通常学級で学ぶということが載ってました。古くからやっている学校なので、ぜひ、新しい学校校舎を建てている時に、例えば、発達障がいがあるといった子たちが過ごしやすい校舎っていうのを考えてみることもよいかもかもしれません。また、今回の資料には記載されていませんでしたが、支援学級の数とか、その辺も、介護する中で変わってくると思いますので、例えば、支援に関わる教員は、小中乗り入れの教員としてそのままスライドして次につなげていくとか、な

んかそういうことも、検討するとよいかもしれないので、内部としてでも構いませんが、その辺の資料は調べておくといいいのかなっていうように思いました。

## 会長

門真は支援学級、多いですよ。

## 委員

この教育の子どもたちの話は小中の話ですよ。ただ高校に向かってどうするかじゃなくって、大学を出たその後、子どもたちが市民として生活していくためには何が必要かということをやっぱり意識しないとダメだと思うのです。そういう意味では、大人になった時に求められる力は何なのかというのを1回ちょっとここで議論する必要があるのかなと思います。

## 会長

キャリア教育指針に記載していた、あのレベルじゃなくてですか。

## 委員

学校制度を考える。先程言った学校制度もやっぱりちょっと頭に置いて考えていかないといけないと思います。

## 会長

他、いかがでしょうか。

## 委員

難しいお話を色々聞かせていただいて。ああ、なるほどと頷いていました。門真小学校がよく出てくるので、すごく懐かしいんですけど。私の娘たち2人とも門真小学校出ておりますので。すごく老朽化している中で、先ほどの委員さんがおっしゃったように。

## 委員

タイムカプセルが、プールを建てた後なくなっている。周りの樹木も全部、抜いています。そのところにおそらくあったんだと思います。教育委員会なり、当時の小学校の校長が、古い学校だからタイムカプセルがあるかもわからんから、こんな箱でも、ちょっとおかしいのがあったら除けといてくださいよという申し出をしたのか。それをしてないから、成人式の後、10人ぐらいの男の子が寄ってきて、おっちゃん、あれがないねんとなった。

## 委員

昔の、卒業生で、結構そういうね、タイムカプセルっていうのをしているじゃないですか。確認せずにね。そういうことをなされたっていうのは、やっぱ子どもの夢を潰すようなことになりましたね。

## 委員

私がね、地域として学校に入っていた時に2つぐらい見つけたことがある。それを開けてみたら、タイムカプセルだった。だけど、やっぱりそういうこともひっくるめて、教育委員会なり学校が校舎などを潰す時は、気にかけてほしい。もう結構、100年以上経っている、学校もかなりあるので。



## 委員

以前あったウサギ小屋は私が PTA で作ったんですよ。それもなくなってしまっています。飼育することで、子どもたちが、生き物を大切にするとか、そういう動物に接するっていう経験をさせたくて。確か 100 周年の時だったと思います。

## 会長

あれですね、縦のつながり、時間のつながりが切れているっていうことですね。

## 委員

キッズサポーターも。昔は地域の方がかなり協力していたんですけども、コロナのこともあったりして、今はそれも途絶えて、子どもたちと接する地域の方がちょっと少なくなってきたのかな。私は、文化協会として出ているんですけども、一応、民生委員として、小学校とつながりがあります。門真小校区の民生委員さんを自動的にキッズサポーターとして活動していたんですけども、それが、今は制度が変わりまして、申し出ないとされないとか、そういう制度も色々変わってきておりますので、やっぱり地域の方と子どものつながりっていうのがちょっと希薄になっているんじゃないかなと思います。

## 委員

キッズサポーターとか 110 番の家とかいうのは、PTA もやり手がおらんかもわからんけども、小学校の PTA 本部役員が各地区の地区委員さんをお願いして、一括して申し込むという形が今まで。ところが、もう PTA もなしになって、自治会に持ってきたわけです。でも、自治会ででもとんでもない話で、これ以上自治会とか使ったら、自治会の班長、やり手がおらん。チラシもあるけどどのセクションに申し込みしたらええんかも書いてない。私は、キッズサポーターもやりましたが、青指協でも回っているから、2つしてもどうしようもないんで、指導員 1 本に絞って、2 本も旗はいらないからお返ししたいんやけども、しっかりしたプロセスがはっきりしてないのでわざわざ誰も行きませんよ。

## 会長

前回と今回、2 回合わせて、門真がどういう教育をめざしているのか、それからそれに対して、実際の門真の学校の児童生徒数ですとか、あるいは学校の古さ、老朽化等について、色々、ご説明をいただきました。この 2 回は、学校再編を考える時の基礎体力として、次回から、学校の再編についてどういう風に進めていくのかということについて、少し具体的に、議論をしたいと思います。皆さんそれぞれ、地元の情報はお持ちだと思いますので、次回から、学校再編のアイデアをいろいろ出していただいて、充実した内容で進めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは、これで閉会にしたいと思います。ありがとうございました。